

逝去された名誉会員等への追悼文

宍戸昌夫先生を偲んで



1916年11月26日 生まれ
 1942年 北海道帝国大学医学部卒業
 厚生省厚生科学研究所嘱託
 1943年 厚生省研究所技手
 1946年 国立公衆衛生院微生物学部
 1948年 国立予防衛生研究所兼務
 1950年 横浜医科大学衛生学講師
 1951年 横浜医科大学衛生学助教授

1961年 横浜市立大学医学部公衆衛生学教授

1982年 横浜市立大学名誉教授

鶴見大学女子短期大学部教授

日本公衆衛生学会名誉会員，横浜市立大学名誉教授の宍戸昌夫先生が，平成27年11月26日の99歳のお誕生日にご逝去されました。

宍戸昌夫先生は，国立公衆衛生院微生物学部を経て，昭和25年に横浜医科大学衛生学講師として着任され，翌年助教授に昇任され，「公衆衛生学」の教育を担当されて，昭和36年に公衆衛生学教授に昇任されています。

日本公衆衛生学会では，昭和53から62年まで理事，昭和29から62年まで評議員を務められ，この間昭和38年に第20回日本公衆衛生学会総会副会長（横浜），昭和50年に第34回日本公衆衛生学会総会会長（横浜）の重責を担われました。

宍戸先生が横浜医科大学に着任された背景は，「高木逸磨学長（東京大学伝染病研究所出身）が，Pettenkofel の衛生学の域をでていない教育の現状に不満を持たれて，自ら国立公衆衛生院に斎藤潔院長を訪問されて，疫学関係の専門家を欲しいと伝えた」ことにあると自らの原稿（曾田研二教授退任記念業跡集：教室開設45周年にあたって，「教室早々の頃」）で触られています。衛生学教室の一室が宍戸研究室として与えられ，国立公衆衛生院時代の恩師の野辺地慶三先生から受けた公衆衛生概説のノートを中心に「公衆衛生学」の教育に励まれ，講義のない日には公衆衛生院で実験を続けたそうです。公衆衛生学の教育は，座学だけでなく施設見学も多く取り入れて，わが国の公衆衛生従事者の人材育成機関である国立公衆衛生院，横浜市保土ヶ谷にある日本初の近代的浄水施設の西谷浄水場，法務施設の集団給食施設，入浴施設，その他，新子安にあ

った某自動車工場などに学生を引率されたそうです。ご研究は，当時の日本人の死亡原因の第一位であった結核対策を中心に，社会医学全般にわたって取り組まれました。

宍戸昌夫先生は北海道帝国大学予科の昭和12年第30回記念祭寮歌「春未だ浅き」を作曲されたことでも著名な方で，旧制高校などの寮歌をこよなく愛され，北海道寮歌祭，横浜寮歌祭にも参加し続けられました。

筆者が平成20年に4代目の公衆衛生学（平成15年より社会予防医学）教授として，国立保健医療科学院人材育成部から着任した際には，宍戸先生ご出身の国立公衆衛生院の流れを汲む国立保健医療科学院関係者が横浜市立大学の公衆衛生を担当することになったことをとても慶ばれ，自筆の細かな字でお祝いのお手紙を頂戴して，とても感動したことをよく覚えております。その後も宍戸先生と当方の文通は何往復もさせていただき，肌理の細かいご配慮，ご指導に深く御礼申し上げる次第です。

宍戸先生は，平成27年11月26日の99歳のお誕生日にご逝去されましたが，その前日まではお元気にご自宅でお過ごしになられていたそうで，同日朝に訪問介護の担当者が玄関でいつものように呼び鈴をならしてもドアを開けにこられないことで天に召されたことがわかったそうです。宍戸先生は敬虔なクリスチャンで，お別れ会は日本基督教団横浜指路教会で厳粛に執り行われました。宍戸先生は同教会で奥様のお別れ会を執り行われてから，ご自分のお別れ会についても計画を練られ，牧師様に読み上げてもらいたい聖書の一説や賛美歌などのリストを作られていたそうです。教会でのお別れ会は，牧師様も99歳のお誕生日に天に召されたことはとても祝福されることとお話しされたように，多くの参加者が辛く悲しいお別れというより明るく華やかなお別れ会であったという印象を受けたのは宍戸先生のお人柄があつてのことと拝察いたします。

お別れ会のあと，教会の外では，「春未だ浅き」を高らかに放吟される北大同窓の方々の旧制大学予科時代の寮生のいでたちにくたく感動いたしました。

末筆ながら，宍戸昌夫先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

横浜市立大学医学部
水嶋春朔

曾田研二先生を偲んで



1932年10月28日 生まれ
 1959年 横浜市立大学医学部卒業
 1960年 国立予防衛生研究所
 1965年 東京大学伝染病研究所
 ウイルス感染研究部助手
 1971年 群馬県衛生研究所主任研
 究員
 1973年 愛媛県衛生研究所長

1980年 千葉県衛生研究所長
 1982年 横浜市立大学医学部公衆衛生学教授
 1998年 横浜市立大学名誉教授

日本公衆衛生学会名誉会員、横浜市立大学名誉教授の曾田研二先生が、平成28年1月14日呼吸不全のためにご逝去（享年83歳）されました。同じく名誉教授の宍戸昌夫先生が、平成27年11月26日の99歳のお誕生日にご逝去され、平成27年度には公衆衛生学教室を築き上げ発展されたお二人の名誉教授をお見送りするという深い悲しみに包まれました。

曾田研二先生は昭和7年10月28日、当時日本統治下の台湾台北市にてご誕生されました。ご尊父の曾田長宗（たけむね）先生は、当時台湾総督府衛生課長、台北帝国大学医学部衛生学・熱帯病研究所教授の要職にあられ、戦後は厚生省統計調査部の部長としてわが国の衛生統計の近代化にご尽力され、さらに厚生省医務局長を経て、国立公衆衛生院院長として我が国の公衆衛生の人材育成を牽引してこられたご経歴をもたれる日本の公衆衛生行政、公衆衛生学研究の第一人者で、多くの後輩、門下生を育成されたことで著名な先達でいらっしゃいます。

曾田先生は、昭和34年に横浜市立大学医学部をご卒業され、聖路加国際病院での医学実地修練を経て、国立予防衛生研究所リケッチア・ウイルス部実習生、同厚生技官、東京大学伝染病研究所（現医科学研究所）ウイルス感染研究部助手としてウイルス学に関する基礎的な研究に従事され、研鑽を積まれました。昭和46年群馬県衛生研究所、50年愛媛県衛生研究所長、55年千葉県衛生研究所長を経て、57年10月に横浜市立大学医学部公衆衛生学講座に宍戸昌夫先生の後任として2人目の専任の主任教授に就任されました。平成10年3月に定年退職するまで16年の間に、公衆衛生学の教育、研究、社会貢献、国際協力にご尽力されました。公衆衛生行政医師、衛生

研究所研究職を中心に、多くの研究生が教室に日参し、16人の学位研究を指導しました。曾田先生に医学部学生時代に薫陶を受けた初期の学生である筆者（昭和62年卒、平成8年から12年まで曾田教授の下で学内講師、平成20年から社会予防医学教室教授）と西田道弘先生（63年卒、卒業後厚生省入省、現さいたま市保健所長）は、その後公衆衛生の道に進みました。さらに横浜市や東京都等で公衆衛生行政医師として活躍している教え子も複数います。

退任後には、横浜市総合保健医療財団常任理事、横浜市総合保健医療センター長を経て、国際協力の実践のフィールドとして国際協力事業団（JICA）長期専門家「中国安徽省プライマリーヘルスケア技術訓練センター」プロジェクトリーダー（平成12年3月から2年間）を委嘱されて、中国における国際協力のお仕事にご貢献されました。

曾田研二先生のお仕事で特筆すべきは、エイズサーベイランスのお仕事であったと思われます。ウイルス学研究と公衆衛生学の専門性を活かして一早くエイズ流行の予見と対策の重要性を強調され、厚生省エイズサーベイランス委員会委員、同公衆衛生審議会専門委員会委員、同エイズ国際協力プログラム推進検討委員会委員、神奈川県エイズ問題専門家会議委員、横浜市エイズ対策会議議長などの重責を歴任されました。

学会活動では、日本公衆衛生学会の他に日本衛生学会、日本疫学会、日本ウイルス学会、日本エイズ学会などの理事、評議員などを歴任されました。平成9年には第56回日本公衆衛生学会総会を「世界に開かれる保健 人類の健康と未来のために」のテーマを掲げてパシフィコ横浜で主催されました。特に「国際化時代の保健と医療」と「薬害問題と公衆衛生」の2つのシンポジウムは、学会長として曾田先生が力を込めてご準備された企画でした。「社会正義」が大事だとお話されていた曾田先生のライフワークを集大成する企画であったと懐かしく思い出します。

尚、曾田研二先生は、平成10年横浜市功労者表彰（横浜市長）、14年栄誉証書（中華人民共和国）、28年2月12日閣議決定にて正五位、瑞宝小綬章を死亡叙位・叙勲されました。

末筆ながら、曾田研二先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

横浜市立大学医学部
 水嶋春朔

高田 勗先生をお悔やみして



1929年 2月8日 生まれ
 1951年 慶応義塾大学医学部衛生学教室助手
 1956年 労働省入省
 1963年 労働省中央じん肺診査医
 1965年 労働省労働衛生課課長補佐
 1966年 労働省中央労働衛生専門官
 1968年 北里大衛生学部助教授

1969年 同大学衛生学部教授
 1972年 同大学医学部教授
 1994年 北里大学名誉教授
 中央労働災害防止協会常任理事・中央労働災害防止協会労働衛生検査センター（現労働衛生調査分析センター）所長
 2000年 中央労働災害防止協会労働衛生調査分析センター技術顧問
 2009年 中央労働災害防止協会顧問

高田 勗先生は平成28年3月21日に肺炎でご逝去されました。享年87歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。高田 勗先生を偲ぶ会は、去る5月15日に京王プラザホテルで470人を超える関係者の参席のもと開催されました。ご来臨頂いた方々に実行委員会の一員として感謝申し上げます。

高田 勗先生は、昭和28年本学会員となり、平成22年10月に名誉会員になりました。その間、昭和43年4月より平成8年6月まで評議員を勤められました。高田 勗先生は昭和4年2月のお生まれで、昭和25年3月に慶應義塾大学をご卒業後、昭和26年8月慶應義塾大学医学部衛生学教室助手に任用され、昭和31年2月に労働省へ入省し、労働省中央じん肺診査医、同省労働衛生課長補佐、同省中央労働衛生専門官を勤められました。その後昭和43年7月北里大学衛生学部助教授として赴任、教授を経て昭和47年4月同大学医学部教授、平成6年4月北里大学名誉教授となりました。

平成6年4月から中央労働災害防止協会常任理事・労働衛生検査センター（現労働衛生調査分析センター）所長となられ、平成12年4月に同センター技術顧問となり、その後同協会顧問を勤められました。平成19年には瑞宝中綬章を受賞されました。

公衆衛生学領域で、高田 勗先生は多くの学術団体の運営と発展に貢献をされました。日本産業衛生学会理事・監事、第66回学会長、日本産業衛生学会

関東地方会長、日本労働衛生工学会幹事（運営委員）、日本ストレス学会理事長・第7回学会長、日本産業精神保健学会理事長、日本職業・災害医学会（旧災害医学会）理事・第35回学会長等、その他多くの学会の企画、運営に参画し、それぞれの学会の発展のために活躍されました。

公的活動では、労働省じん肺審議会長、同省中央労働基準審議会公益委員、(独法)労働者健康福祉機構医監、(社)日本作業環境測定協会副会長、(社)日本労働安全衛生コンサルト会会長、を歴任されました。

このように高田 勗先生は労働衛生分野でのご活躍が顕著ですが、公衆衛生分野でも、全国クリーニング生活衛生同業組合連合会の公衆衛生活動である「クリーニングと公衆衛生に関する研究委員会」の委員長として昭和54年度より同業界の公衆衛生と労働衛生の発展に貢献されました。この委員会は、院内感染防止からみたクリーニング対策、クリーニング業従事者の労働衛生、健康管理、作業環境等を含めた総合的対策を推進するために同組合が設置した委員会です。

前述したように、高田 勗先生は昭和47年に北里大学医学部衛生学・公衆衛生学（衛生学）単位の初代教授となり、公衆衛生学単位の植松 稔教授と共に同単位の基礎を築かれ、後進の指導に当たられました。筆者は高知医大に教授として転出された中村健一助教授の後任として、昭和55年4月から高田勗教授の下で衛生学担当の講師に着任して以来、労働衛生分野で教育・研究を指導して頂きました。ご指導は学内に留まらず積極的に行政研究の場に出していただき、この分野で一流の方々と交流する機会を与えて頂きました。

何時も「にこにこ」と笑みを絶やさず、磊落でしたが、時には厳しい人生教育もありました。特に深夜電話で懇々と長時間にわたり指導して頂いたことは、今となっては懐かしく、また有り難い思い出となっています。また定期的に開かれた某飲食店での医局会では、勉強だけでなく社交術も社会医学で重要なことを教えて頂いたものと思います。

本学会だけでなく労働衛生分野にとって、高田勗先生のご逝去は、大変な損失であり残念ですが、先生のご業績を偲びながらも、先生の教えを思い起こしながら、なお一層本学会を含めて予防医学の発展に尽力してゆきたいと念じています。合掌
 (一社)日本繊維状物質研究協会理事長・北里大学名誉教授
 相澤好治

竹本泰一郎先生を悼んで



1936年 5月1日 生まれ
 1962年 北海道大学医学部卒業
 1967年 東京大学医学系研究科・社会医学専門課程・公衆衛生学専攻修了
 1968年 東京大学医学部・人類生態学教室助手
 1971年 東京大学医学部・人類生態学教室講師

1973年 東北大学医学部公衆衛生学教室助教授
 1977年 長崎大学医学部公衆衛生学教室教授
 1987年 第46回日本公衆衛生学会総会学会長
 2002年 長崎国際大学健康管理学部学部長
 2007年 佐世保市保健所長
 2011年 長崎県立佐世保看護学校校長
 2016年 退職
 長崎大学名誉教授

日本公衆衛生学会名誉会員 竹本泰一郎先生が享年80歳で逝去されました。先生は、1962年北海道大学医学部卒業、1967年東京大学医学系研究科・社会医学専門課程・公衆衛生学専攻を修了されました。1968年東京大学医学部・人類生態学教室助手、1971年講師に昇任されました。1973年東北大学医学部公衆衛生学教室助教授、1977年長崎大学医学部公衆衛生学教室教授に就任されました。1987年には第46回日本公衆衛生学会総会を学会長として長崎の地で開催されました。2002年長崎大学退官後、長崎国際大学健康管理学部学部長に就任されました。2007年には佐世保市保健所長となり、2011年長崎県立佐世保看護学校校長に就任され、2016年3月まで教鞭を執られました。

先生は、産業保健学、人類生態学、地域保健学、災害医学等の研究を行われました。東大時代には、鉛取り扱い職場での健康影響調査や地域での水銀負荷量の測定についての研究をされたと聞いています。東北大時代に始められた南米ボリビアにおける人類生態学的研究について、熱帯低地での日本人の移住適応、アンデス高地民の低地適応、日本人の高地適応に関する研究を行われました。この調査は1988年まで続き、当時大学院生だった私も同行させて頂き、標高4000 mのチチカカ湖畔の寒いアドベの家で5ヶ月間の住み込み調査を経験させて頂きました。長崎大就任後は、生月・平戸島での母子保健

調査を端緒として、壱岐三島地区、上五島奈良尾町、西彼大島町など多くの島嶼部でウイルス感染症の流行から生活習慣病の予防まで幅広い公衆衛生研究活動を行われました。1990年から5年間噴火災害が続いた雲仙普賢岳噴火災害については、長崎大学噴火災害研究教育グループを組織し、積極的な研究を行い復興に貢献されました。

先生との最初の出会いは大学4年生の時、1982年7月長崎大水害の時でした。未曾有の大雨のため、土石流、崖崩れ、床上浸水の被害が出ました。夏の暑い時期で感染症蔓延の可能性があり、被災地の消毒を行うこととなりました。長崎県から医学部に要請があり、その窓口が医学部公衆衛生学教室でした。消毒活動に参加する学生を探していると聞き、私は公衆衛生学教室に赴きました。私にとって初めての公衆衛生活動であり、社会医学の重要性を学ばせて頂きました。その後はホームパーティにも参加させて頂き、先生からは公衆衛生学にとどまらず幅広く話を聞かせて頂きました。

卒業後はそのまま、先生が主宰されている公衆衛生学の大学院生となりました。研究テーマを何にしたかとなった時、これからは人口が高齢化してくる。骨粗鬆症と認知症（当時は別の表現でしたが）の増加が懸念されるので、公衆衛生学的に重要になると言われました。私は整形外科にも関心があったので、骨粗鬆症（骨の老化）をテーマに西彼大島町で調査を行いました。その結果をまとめて、学会で発表することになりました。当時の高齢者保健は循環器研究が花盛りで、骨粗鬆症の発表は私だけでした。未熟な私は研究のトレンドに乗っていないのではないかと思ったりもしましたが、現在では多くの骨粗鬆症関連の発表がなされています。先生の慧眼に頭の下がる思いです。

公衆衛生学教室の教官となり、先生の下研究を続けさせて頂きました。昨今では専門性が重視され、狭く深くの研究になってきましたが、先生が「公衆衛生学は広く、時に深く」と言われたのは印象的でした。

長崎大学退官後も頻りに食事をご一緒させて頂き、昔話からこれからの公衆衛生学の展望までを話して下さいました。お元気だったので、まだまだご指導頂けると思っていた矢先の訃報でした。残念でなりません。

ご冥福をお祈りいたします。

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科公衆衛生学分野
 青柳 潔

仲村英一先生を偲んで



1931年11月29日 生まれ
 1956年 東京大学医学部卒業
 1957年 茨城県衛生部
 1962年 厚生省大臣官房統計調査部
 1982年 厚生省大臣官房統計情報
 部長
 1985年 厚生省保健医療局長
 1987年 厚生省健康政策局長

1990年 環境衛生金融公庫理事

1994年 勲医療情報システム開発センター理事長

2000年 勲日本医療保険事務協会理事長

2002年 勲結核予防会理事長

仲村英一先生は私が厚生省に入省したときの上司でした。仕事を手取り足取りではなく背中を見せ教えてくれた。しかし時には、普通は担当補佐の仕事であるが、国会の質問取りを「ついて来い」と実際にやってみせてくれたり、課長通知の起案をさせるという役人のイロハの指導を受けた。また、暇を見つけては、WHOの文書の翻訳をされていた。

役人は、組織で仕事をするので、業績を語るのは至難の業であるが、印象に残る第一は保険局の医療課長の時代、有名な56年診療報酬の改訂をこなされたことである。出来高払いの原則に楔を打ったと評価されている。また、難病対策の立ち上げをしたことがご自慢で、初代の難病課長だと何度も誇らしく話しておられた。その時の医学の最先端に関与し、世界的にも評価される難病の研究事業を立ちあげられた。

結核予防会の理事長の時代にもお仕えした。ちょうど結核研究所の在り方検討委員会が始まる時で、5年前の報告書の見直しの手伝いを命じられた。仲村先生は細かい事はあまり気にされず、歴史ある研究所の世界的な存在感をどう高めて行くか、ご心配なさっていた。また、低蔓延国の結核対策の海外調査に参加するよう勧めていただいたり、ウズベキスタンの結核対策の評価の派遣を命ぜられたり、国際化の流れに目を向けるよう指導を受けた。結核予防会の70周年記念式典には天皇皇后両陛下の行幸啓をいただき、仲村理事長が先導されていたが、このとき陛下がご自分も結核の治療をされていたというお話があり、会場の全員が驚かされたことは忘れられない。

「人偏（にんべん）の仲村です」とお電話いただく時は、仕事の話でなく、ほとんどは食事のお誘いで、楽しい時間を過ごさせていただいた。ダンスもうまく、ゴルフも麻雀も如才なく楽しんでおられた。

最後は今年の2月、車いす姿であったがお元気に談笑され、これが多くの仲間、後輩とのお別れになった。

衛生行政に生涯を捧げられ、様々な分野で、技術行政の間口を広げ、また深め、今日の公衆衛生対策の発展に貢献された尊敬する先輩の御霊安かれと祈ります。

(一社)日本医療安全調査機構専務理事 田中慶司

仲村英一先生が厚生省幹部として、日本の公衆衛生の国際化の舞台に立って指導力を発揮されたのは、1970年代の後半から1990年台の前半、日本がジャパン・アズ・ナンバーワンという気概で海外に積極的に打って出ようとする時代であった。

先生の優れた国際感覚と語学力が遺憾なく発揮されたのは、WHOなど国際関係を一手に引き受けるというポストの統計情報部長になられてからのことである。WHO会議においては日本政府代表団の責任者を頻回に務められ、1985年の第38回WHO総会では5人の総会副議長の筆頭に任じられた。先生は過去3年間の議事録から抽出した会議用語集作成を筆者に下命され、徹底的に事前勉強された。また、それを楽しんでおられるように見受けられた。晩年、後進を指導される際、「子曰、知之者不如好之者、好之者不如樂之者」という論語を引用しながら「君の担当している事柄を日本で一番真剣に考えているのは君のはずだ。それを楽しいと思わなければ、役人の仕事などはつまらないから止めてしまえ」と言っておられたが、自ら実践されていたのである。

このように周到な準備をされたので、議事の采配は真に安定感があり、色黒く長身でスマートな先生を見て「本当に日本人か」と呟く代表団の声を私は耳にした。日本の保健医療の国際化は初めての選挙による国連機関長としてWHO事務局長 中嶋宏博士を誕生させたが、再選については危ういという状況に至った。ここでも仲村先生は執行理事として綿密に準備をされ、中嶋先生の功績とこれからの努力すべき点を明らかにされ、その結果見事再選が果たされ、ポリオ根絶事業など今日にいたるWHO事業の多くが軌道にのった。

国際的にも凛とした至誠の人、仲村英一先生が残された様々な教訓を後に続く我々が生かし、平和国家としての日本が世界に貢献してゆく決意である。先生の御霊が安らかなることを心からお祈りする。

なお、先生は「医療政策オーラル・ヒストリー：仲村英一（元厚生省健康政策局長）」(医療経済研究機構、2013年)で詳しく当時の軌跡を語り、貴重な資料として残されている。

元WHO事務局長補・慶應義塾大学特任教授
 中谷比呂樹

公益財団結核予防会発行複十字2016年371号に掲載された追悼文を同財団と執筆者の同意のもと、事務局で再編集したものです。